日時：2021 年 9 月 16 日
時間：14：00〜15：40
場所：日本自立生活センターの事務所
小泉浩子さんへのインタビュー（鈴木良・文字起こし）

鈴木：それでは、はじめさせていただきます。

小泉：よろしくお願いします。

鈴木：小泉さんは JCIL に関わったのは何年からなんですか。

小泉：1990・・・。今から 30 年前。

鈴木：30 年前ということは、1990 年代？

小泉：そうですね。

鈴木：長橋さん（創設者）の関係で来られたんですか？

小泉：その関係ではない。私はもともと、福井県の出身で。高校を卒業してから、出てきて、9 年間は、何か所かで働いていました。それでうまくいきませんでした。

鈴木：出てきたというのは京都に？

小泉：そう、一人で出てきた。それで、何か所かで働いてうまくいかなくて、その先どうやっていこうかなぁと思ったときに、ここの香田さん（現代表）という人にお会いしまして、で、その関係で、JCIL に来ました。

鈴木：ということは、JCIL ができて、何年か経った後ということですね。

小泉：はい、そうです。

鈴木：アテンダントサービスというのはいつ始まったのですか。

小泉：設立当初から。最初はここが立ち上がったのは、宮川泰三さんという方が施設にいて、そこの施設が合わなくて、なんとかしてほしということで長橋さんのところに行き

ました。そこがきっかけで、アメリカのバークレーの話も一方であって、立ち上がったんです。そこそこ重度なんですよ。

鈴木：今、宮川さんはいらっしゃるんですか。

小泉：もう死んだ。

鈴木：宮川さん？

小泉：はい。

鈴木：かなり重度だった？

小泉：かなりって、何が重度かって（笑）。

鈴木：あっそうですね（笑）。

小泉：脳性麻痺で、まっ、重度の方だと思います。

鈴木：へぇー。

小泉：電動車いすに乗って。

鈴木：あっそうですか。

小泉：結構、有名やで。

鈴木：あっそうですか、すいません、調べてみます。

小泉：パーフェクトバスを走らせる運動をずっとされていた。

鈴木：へぇー。パーフェクトバス？

小泉：うん、その頃は、障害者が乗れるバスっていうのがなかったので、車いすでも乗れるバスを広げていこうという運動をずっとしてました。

鈴木：その方が施設にいて、長橋さんに相談して、で、出るということ？

小泉：もう帰りたくなくて。

鈴木：え？

小泉：帰りたくない。で、そのまま長橋さんの家に。

鈴木：へぇー。

小泉：で、こういう重度の方が地域で暮らすには、介助者が必要だということで、CIL という組織が、必要だということで、立ちあげたということを聞いています。

鈴木：ということは、最初から、施設から地域にということを

小泉：やってた。

鈴木：ということで、始まっていたということなんですね。

小泉：そう。

鈴木：で、アテンダントサービスというのがそのあとに？

小泉：後というか、長橋さん、よくバークレーにいっていて、エド・ロバーツ、ジュディ・ヒューマンとも仲良しで、日本で初めての CIL をつくるんだと。契約書があるんですよ。

鈴木：契約書というのは？

小泉：あなたは CIL という名称を使っていいですって。

鈴木：そうですか、バークレーから。

小泉：うん、そういうこと。

鈴木：で、87 年に始めたということですよね。で、アテンダントもやって。

小泉：はい。

鈴木：ということは、アテンダントという言葉はアメリカの影響を受けていますか？

小泉：はい、そうだと思います。

鈴木：向こうもそうやって、使っていましたもんね。

小泉：はい。

鈴木：これって、有料ですよね、サービスとして。

小泉：うん。最初は 100 円から始まって。

鈴木：今って、おいくらですか。

小泉：コロナが始まってからは、行けなくて。1000 円です。

鈴木：1000 円？　1 時間 1000 円？

小泉：うん。今はね。

鈴木：利用される人は、2 時間とか、3 時間で使うんですか。

小泉：買い物に行きたいというのが多かったです。

鈴木：内容って、どこまでやってくれるという、そういうのがあるんですか。

小泉：だいたいは、施設の職員がかんでくるから、何時までに帰ってきてくださいとか、これは食べたらあかんとか、もめることが多かった。

鈴木：もめることが多かった？

小泉：うん。本人は、だって、縛りから抜けたくて、介助者を使って、自由を求めているのに。施設側は管理だから、体調に悪いとか言われたことがある。

鈴木：なるほど、あのー、その頃から、施設を訪問して、会いに行ったりとか、結構たくさんやっている？

小泉：うん、そう。やっています。

鈴木：JCIL は、本体の運動として、そういう地域移行というのは大事にされてきた？

小泉：うん、もう、大事にしてたというか、それがないとあかんという感じで。本人たちも施設から出て、支援をしている人が多かったし。宮川さんもそうだし。

鈴木：宮川さんも？

小泉：そう。自分も出てきたから、出したいと思ってやってはった。

鈴木：ということは、出てきた人が、今度は、出たいと思う人を。

小泉：うん、そうだね。そんな感じ。

鈴木：出たいと思う人をサポートする感じで。

小泉：うん、今と一緒。

鈴木：今と一緒ですよね。でも、それを当初からやってきて。

小泉：うん。

鈴木：行き先は、身体の施設が多かったんですか。

小泉：うん、多い。残念ながら、勉強不足もあって、知的の方はできなかったです。

鈴木：身体というと、療護施設とかですか。

小泉：ふれあいの里。こひつじ（こひつじの苑）とか。亀岡の奥の方の。

鈴木：結構、遠いですね。亀岡の方だと。

小泉：うん、遠い。施設というのは、だいたい、外れたところにあるから。

鈴木：うん。行くときって、どうやって行くんですか。車で行くんですか、電車で行くんですか。

小泉：いろいろある。

鈴木：いろいろ？

小泉：本当は、買い物に行きたいということには、ここの送迎者で迎えに一緒に行って、買い物に行ったというのもあったし。

鈴木：それは、亀岡とか、遠いところも、そうやってやっていたということですか。

小泉：うん。

鈴木：その交通費とかは？

小泉：本人が出す。その時代はね。

鈴木：その時代はね。JCIL の事務所から施設まで？

小泉：介助者の家からそこまで行くのに。

鈴木：じゃ結構なお金になります？

小泉：結構かかりますね。時給よりも高かったりして。

鈴木：そうですか。今でもそうなんですか。

小泉：今もアテンダントというのはそういうかたちをとっている。でも、今は、アテンダントはあんまり残っていないですね。3 人くらいかなぁ。今でも続いている。最近はコロナで入れないけど。

鈴木：入れたら、3 人だけなんですか。

小泉：そんなことはないか、もうちょっといる。プールに行くという人もいるから、6 人かなぁ。

鈴木：どうしてその方々は、アテンダントサービスがあるっていうことを知ることになるんですか。

小泉：キャンプっていうのがあって。

鈴木：あのー、車いす仲間の会の？

小泉：そう、うん。あれで、知り合って、というのが、一番多いと思います。今までは、それが大きかったです。

鈴木：病院の中で、物を片付けたりとか、そういうのもやったりしますよね。

小泉：うん、そうだね。施設もあったのはあったけどね。

鈴木：部屋の片づけとか？

小泉：うん、部屋って言っても、あの頃は 4 人部屋と、6 人部屋とか、ほんまに狭い。そんなに片付けって言っても、あんまりない。

鈴木：あっそうですか。アテンダントを使って、地域で、自立生活している人たちのことを知ってもらおうとか、そういうことっていうのは、意図的にされていますか。

小泉：アテンダントだけで自立というのは、重度の場合には、難しい。全身性障害者派遣事業、他人介護料と、ヘルパーと、3 つセットで、自立生活は重度でもありました。

鈴木：はい、ありましたよね。

小泉：はい。

鈴木：その生活があるよーみたいなことは、アテンダントの人が、お伝えしたりとか、なんかその人と会ってもらったりとか、そういうことって、アテンダントの人は役割がありましたか。

小泉：あの、広まっていく経過としては、病院と同じで、あの人たちが来て、隣の知らない人が退院するというけど、自分もやりたいなぁーていう、ことで広まっていく形があった。すすめていくということはなかった。

鈴木：ですよね、というのは、藤田さんと、植田さんって、アテンダントを使っているじゃないですか。

小泉：はい。

鈴木：それで、僕の勝手な想像で、アテンダントを使ったから、自立生活のことを知ったのかなぁって思ったんですよ。

小泉：はい、藤田さんはね、もともとはね、今はピープルファーストの支援をしている永井さんが、鳴滝養護学校の先生やったんです。その先生が、熱心な方で、障害者は早くから、親とか家族以外の、介助に慣れておかないとあかんということで、学校の授業の中に、ここともに電話で説明して、やってくれた時代があったんです。藤田さんも。

鈴木：藤田さん？

小泉：高校生の時に。

鈴木：はい。

小泉：そっから使うようになりました。ずっと使ってはったけど、何年か、使わない、関わりのない時代があって。その後、植田さんの話がでて、や、久しぶりやんって、ということの流れで、きてます。

鈴木：うん。植田さんは藤田さんが使っているのを知らなかったって言っていたんですよ。

小泉：うん。そうやあと思う。

鈴木：他の人の使っているのを見ていて、自分もということで。

小泉：なるほど。

鈴木：ただ、アテンダントを使いながら、それで、自立生活を知るわけではないんですね。アテンダントの人はそういうことをお知らせしたりとか、そういうことはしないんですね。

小泉：あのー、さっきの説明の時に、アテンダント、イコール、重度訪問介護っていう話をされていたと思いますが。

鈴木：あ、パーソナルアシスタンスが？

小泉：違うんです。考えが。パーソナルは、自分が探してこないとあかんし、自分が自分で、だけど。重訪は、やっぱり、事業所がということがあるから。

鈴木：おっしゃる通りだと思います。

小泉：アテンダントを使って、その流れで行けば、一番いいけど、制度を使うから、まだちょっと違うとこがあります。

鈴木：なるほど。でも、アテンダントサービスの目的というか、それを通して、できればその、病院とか、施設から、地域に、最終的に出てきてもらいたいなぁということでやられているんですか。

小泉：いろんな障害者にとって、ちょっとそこは難しいと思っていて。そんなに簡単にいかないから、夢に描くような生活はぜんぜん難しい。人が関わることの難しさという。人と一緒にいることの苦しさ。

鈴木：ん？

小泉：苦しさ。ずっと一緒にいないとあかんで。

鈴木：一緒にいるという。

小泉：人として一緒にいるという。

鈴木：24 時間ね。

小泉：うん。なんかトラブルも出てくるし。全部自分でやっていくことが、施設とは違うし、

私はちょっと反対なんだ。

鈴木：反対というのは？

小泉：私個人は。

鈴木：もちろん。

小泉：パーソナルにやっていく。

鈴木：うん。で、病院とか、施設から、地域に出てもらうことを、目指してというか、JCIL のアテンダントサービスというのはあると。

小泉：目指していく上での最初のきっかけにあるとは、思います。

鈴木：それをきっかけに、地域というはこうことだということだということで、出て行って。

小泉：うん。それはそうだと思います。

鈴木：宇多野から退院されるときに、引っ越しの荷物を入れるときに、JCIL のアテンダントは使われましたか。

小泉：持ち出しという言葉が合っているかどうかはわからないけど、「やって」という感じのところがあったから。

鈴木：「やって」というのは誰に？

小泉：動ける人に。

鈴木：あっ、動ける人にね。スタッフということですね。

小泉：うん。

鈴木：ということは、当事者の方が、アテンダントの利用として支払うことはなかったということですか。

小泉：ないと思う。

鈴木：野瀬さんがそれを使われたと聞きました。

小泉：一人は使ったかもね。

鈴木：引っ越しって普通に考えて、大変だと思うんですね。

小泉：せやけど、その日から、重訪は使えますからね。

鈴木：退院の日から？

小泉：うん。

鈴木：退院の日から重訪の人が入ってお手伝いをしていたということ？

小泉：そう。

鈴木：だけど、それだけでは足りないから、後は持ち出しで？

小泉：うん。たいしたお金じゃない。持ち出しはいっぱい必要。

鈴木：でも、今の制度では、補助してくれないですよね。

小泉：ない。

鈴木：地域相談支援給付って、総合支援法にあるじゃないですか。あれは、JCIL としてはやっていない？（注：以下の小泉さんの回答は、計画相談の話をしている。）

小泉：最初はやらへんかった。それからやらなきゃ、あかんと思ってきました。だけど、行政は使え、使え、って言いはるんです。本人だけでは難しいだろうということもあったし、時間数を減らすというのが、いらんだろうと、客観的にみて、この時間は削ったらいいだろうとか、行政の話としては、今この人はそれだけいるのかとか。最初はみんな自分のことは知っているから、いりません、と。だから、セルフプラン、自分で作るのがいいと思っていたんだけど。今ね、他事業所と、いろんな事業所と。ここは一個の事業所だけで、回していたんですけど、一人の人に 24 時間。でも、もう、

なんかいっぱい事業所ができて、ここも（JCIL も）そんなに入らないなかで。一人の人に 7 つくらいの、そうなったら、まとめてくれる人が必要で、相談支援事業を最近は使ったほうがいい部分はあるかもしれないとは思っている。

鈴木：JC がそれをやるのも一つの選択肢だと。

小泉：やっている、やっている。

鈴木：今、やっている？

小泉：はい。

鈴木：相談支援事業？

小泉：はい。何人もいます。

鈴木：ヘルパー事業と相談支援事業とを両方をやっている？

小泉：そう、両方。

鈴木：でもその相談支援って、地域移行とか地域定着も行っているんですか。

小泉：こっから、ここまでこの制度って、別れてやっているわけじゃないけど。

鈴木：お金は行政からおりているのかどうかを知りたいのですけど、地域支援給付というのがあると思いますが。

小泉：お金の面に関しては、使っていないかもしれない。

鈴木：単価がめっちゃ、低くて、

小泉：あっそうそう。

鈴木：事務的なことが大変で。

小泉：そうそうそう。

鈴木：それでやらないところが多くて、

小泉：多い。

鈴木：JC もそれでやっていない？

小泉：なんで、やりだしたかというと、なんか相談支援やんなきゃいかんから、うちで、やったらいいじゃないか、というところがあって、やったという。

鈴木：今回の宇多野からの退院支援って、制度上は、地域移行支援とか、あるじゃないですか、使っていないじゃないですか。

小泉：使っていない。

鈴木：それを使わない。

小泉：面倒くさいから。

鈴木：単価が低いとか、そういう理由ですかね。

小泉：あの、面倒くさいのと、時間をとられるのが。

鈴木：なるほど。でも、持ち出しが多いじゃないですか、それは制度でお金が出されるべきだと思いますか。

小泉：思いますか、というと、思わないかもしれない。面倒くさいし。お金をもらうとなると、書面に記入があって、なんか、意味がないというか。報告をしなければならない内容が、なんか本人のためになってなくて。こんなことまで書かなければならなかったりするから。

鈴木：なるほどね。あの一

小泉：ただ、荷物を運ぶのだって、事業所の経営から考えれば、やっぱ取ったほうがいいけど。ただ、規模が大きいのと

鈴木：ここはね。

小泉：規模が大きいと、なんか、ぐわーとなっちゃうから。ちょっとのことは、まーええかみたいなところがあるんだと思います。持ってこなきゃっとあんま思わんというか。回ってしまう。

鈴木：回っていますもんね。

小泉：うん。

鈴木：持ち出しなんだけど、なんとかやれちゃうみたいな。

小泉：そうそう。小さいところはシビアだし、一個のキャンセルでも、困るという、話しは聞こえてくる。

鈴木：なるほど。介助の仕事で、ある程度、お金が入ってくるから、それでなんとかやれてしまうわけですよね。

小泉：そう、やれてしまう。

鈴木：だけど、全部、持ち出しだから。

小泉：ワッハッハ。

鈴木：何回も行っているわけじゃないですか。

小泉：何回も行っている。

鈴木：めっちゃ、大変ですよね。

小泉：うん。

鈴木：だから、それはお金が本来つくところだと思うんですけど。

小泉：うん、そうだと思います。

鈴木：ですよね。なおかつ、なんか、細かいことを書かなくていいようにすればいいわけですよね。

小泉：それが一番ね。

鈴木：ですよね。なんで、それを聞きたかったいうのが、JCIL って、運動として、やっていたじゃないですか。（施設から）出すということを。

小泉：そう。

鈴木：そこに、お金が入るっていうことになると、そのこと自体がどうなるのかなぁって思ったんですよ。

小泉：あの、そこの点に関しては、介助の人が、運動にもお金を払わなければならんということになってしまって、そこらへんは、今、自分の中でも、もやもやするから。こうやって、地域移行の話をしていたときには、何人か、健常者がいて、活動をやりたいと思っているから来ているのに。しゃべっていても、時給いくらで、勤務みたいになるんですよ。そこらへんの、もやもや感は、私の中にはあるけど。

鈴木：運動としてやってきたことが、勤務になっていく。

小泉：そうそうそう。

鈴木：これはどうなっちゃうんですか。持ち出しで、運動として、やっていた方が、大事なものが失われずに？

小泉：それはあると思います。でも、人が集まらへんと思うんですね。運動だけだと。

鈴木：だけど、お金がつくと、勤務になるじゃないですか。

小泉：なって。

鈴木：なりますよね。そうしたら、地域移行ってどうなっちゃうのかなぁって。今みたいにできるのか、機械的になっちゃうのか。

小泉：人にもよるけどな。人によっては、仕事以外の関わりをやってきた時代の子はやれる

んですよ。

鈴木：うん。

小泉：でも、遅くに入ってきた人は難しいんだね。

鈴木：なるほど。世代によって違う？

小泉：そう。できあがってから、来はった人は、ちょっと難しい。

鈴木：あー、なるほどね。昔から、当事者の人が施設に行って、地域にという運動をしていたじゃないですか。今は、健常者も関わっているような感じがするんですけど、なんか昔と今とで違いがありますか。

小泉：腹が立つ部分が違うかもって思うときがあります。社会に対するね。

鈴木：なるほど。当初、小泉さんが入られた 90 年代って、当事者の人が施設にがんがん、行っていたんですか、基本は。

小泉：はい。

鈴木：そこに一緒に行く健常者の人も一緒に地域移行をやっていたんですか。

小泉：やっていない。

鈴木：やっていない？

小泉：昔はね。今はなんで、高橋くんとか、段原くんとかがやっているかというたら、当事者が率先して、ついていくという形だと思うんだけど。最初は。そこは変わっていないと思う。健常者の方が動けるから、やってもらうことがあるけど、基本は同じ。

鈴木：なるほど。ということは当初から、介助者も一緒に行って、一緒に地域移行をやっていた？

小泉：と、思う。

鈴木：今も昔も基本は同じ？

小泉：同じだと思っている。

鈴木：当事者と健常者の役割って、違いますか。

小泉：当事者同士だから分かり合えるというのは、私はちょっと違うと思う。

鈴木：なるほど。

小泉：ほんまにそうだと思う。健常者の、動ける人の方が、便利だったりするから、本人にとっては。ピアカンに対する抵抗感を私の中にはちょっとはもっていて。ただ、自分と似たような環境の人は影響力がありそうだとは思うんですけど。野瀬君が、植田さんを見て、こんなふうになりたいと思ったり、大藪さんみたいに、あんなふうにかっこよく生きたいなぁと思ったり、そういう役割は大きいとは思う。

鈴木：だからと言って、当事者同士で行うことで全てがうまくいくとは限らないということですね。

小泉：そうだと思う。

鈴木：そういうときは健常者がそこに関わると。

小泉：それは大きいと思う。当事者同士で煮詰まって、健常者があいだに入って、うまくいくときがある。

鈴木：CIL によっては、健常者が口を出すと、やめてみたな、ところもあるじゃないですか。

小泉：そうね。

鈴木：JCIL は比較的

小泉：ここは違います。

鈴木：それは昔からそうなんですか。

小泉：いや、違う。昔はあかんかった。

鈴木：えっ、昔はあかんかったんですか。

小泉：いや、そこは訂正。キャンプで、車いすも健常者も関係なく、やっていこうというのが根本にはあるから、それは大きいと思う。

鈴木：あっそうですか。それが母体にあるんですもんね。

小泉：そう。ちょっと違う、他のCILとは。

鈴木：でも、バークレーだったら、手足論というか、介助者を使って、という考え方だと思うんですけど。

小泉：はい。介助に関しては、最初はその方向だったです。でもすぐに、あかんと分かった。それがうまくいかない。でもね、手足論を言っていかんとあかん時代だった、勝てへんかった時代だった。勝てない、利用者が。言うこと聞きなさいと言えへんかった時代はあります。負けているときは、言うこと聞かせんとあかんかったから、手段として、手足論というのは、使っていたんじゃないかなぁっと。

鈴木：JCILでも？

小泉：うん、そうだと思います。

鈴木：でも、ある段階から変わったんですか。

小泉：それは幻想だと分かった。

鈴木：幻想だと分かった？それはいつ頃なんですか。

小泉：知的障害が入ってきたりとか、ALSとか。

鈴木：それは2000年代？

小泉：2010年くらいから。

鈴木：あっそうですか。ということは、10 年くらいなんですか、そういうふうに、手足論じゃなくって。

小泉：そうだね、そうだと思います。

鈴木：健常者が入ったほうがうまくいくみたいな。

小泉：うん。

鈴木：それで入りすぎるところはないですか、健常者の人が。

小泉：まっ、人による。今は、いろんな人がいるからなぁ。いいなぁと思うこともある。偏ると、なんか、ここに入れんから。

鈴木：でも、これだけ利用者の数も多くて、介助者もたくさんいて、いろんな人がいると思うんですけど、それで、健常者も一緒にという話になってくると、うまくいかなくなることも多くなんじゃないかと、人によって。

小泉：うまくいかないことが多くなるけど、いいこともある。

鈴木：でも、それでも、当事者の意向を大事にするという、のがありますよね。どうやって、それが維持されているのかなぁって。

小泉：やっぱり、当事者が目の前に、うろうろしている、どこに行っているいるしね。

鈴木：ワッハッハッハ。理事会は、当事者の人は過半数ですよね。

小泉：ほとんど当事者、健常者は二人しかいない。

鈴木：何人中？

小泉：8 人。

鈴木：本体っていうじゃないですか。この本体っていうのは、当事者が基本的にメンバーなのですか。

小泉：はい。

鈴木：ですよね。

小泉：13 人いる。

鈴木：13 人？その中で代表の方が。

小泉：代表は香田さん。

鈴木：香田さんですねよ。で、事務局長が下林さん。他の方は、みんな同じ立場？

小泉：立場というわけではないけど、なんかここは、上下関係もないよね。

鈴木：13 人の方は利用者でもあるんですよね。

小泉：13 人は、みんな使っている。

鈴木：それ以外にも、利用者がもっとたくさんおられるわけですよね。

小泉：あと、90 人くらい。

鈴木：その利用者の人たちの声というのも、それは反映されるというか。

小泉：温度差がある。やって、やって、というだけの人もいる。

鈴木：そうですよね。それでお聞きしたかったのが、CIL って、ピアカウンセリングってあるじゃないですか。

小泉：ウッフッフ。

鈴木：ワッハッハ。あれって、JCIL は当初やっていたんですか。

小泉：長橋さんは、ピアカンをやるんだったら、ちゃんとカウンセリングの勉強をせなぁ、あかんと。障害者だからということで、そんな、できるもんじゃないと。まちごうたらあかんと。世間はなんか、カウンセリングをやっているということで、もてはやす

けど、そんな簡単なものではないと言われてた。

鈴木：では、当初からやっていない？

小泉：やっていない。ピアサポートということはしていた。カウンセリングはやっぱ、難しい。

鈴木：CIL のピアカウンセリングのマニュアルがあるじゃないですか。そういうのはやっていない？

小泉：やってない。

鈴木：一人何分という時間があって、一人ひとり話していってみたいな。感情の解放とか。

小泉：はいはい。やってない。

鈴木：やってないですよね。

小泉：私、参加したことがあったんだけど、すごい抵抗があった。

鈴木：ピアサポートという言葉、これは前から使っているんですか。

小泉：うん、使っている。

鈴木：ふーん。ピアサポートというのは、どのような意味？

小泉：一緒に考えるということ。

鈴木：基本、当事者ですよね。

小泉：基本というか、絶対当事者。

鈴木：宇多野から退院した後の当事者による支援を、ピアサポートと言っていますか。

小泉：野瀬君とはやっている。今もやっている。

鈴木：あれも、使いたい人はやるという感じですよね。植田さんはやっていないですよね。

小泉：うん、なんか、そうだね。

鈴木：うん。

小泉：行こうとしたけど、なんか、いらんと、言われた。一人の方がいい。

鈴木：そのときは、一緒にコーヒーを作っている伊藤さんみたいな、健常者でも OK、ということですか。

小泉：それは、支援。ピアサポートじゃないけど、必要だと思う。

鈴木：そこは、必ずしも当事者でなければならないというわけではないということですね。

小泉：いろんな人が関わるのが一番いいんじゃないかと思います。

鈴木：いろんな人が関わっていますよね。当事者も複数、関わっていますよね。それは意図的？野瀬さんの支援は大藪さんが主に行っていたけど、岡山さんも行っているし、小泉さんも行っているし。それは、その方が。

小泉：そのほうがいいと思う。あえてそうしているわけではないけど、みんなが応援したいと思うから。

鈴木：そこは、なんか、おもしろいなぁと思っていて。

小泉：あっそうなんだ。

鈴木：普通、担当の一人の人が行って、という感じなんですよね、だいたい。

小泉：ふーん。

鈴木：だけど、JC をみていると、いっぱいいて、皆さんそれが良かったって言っているんですよ。

小泉：行っている方も楽しくて。

鈴木：なんか、みんなで考えていますよね、どうしたらいいかと。

小泉：うん。

鈴木：だから、一人が悩んだりしなくて、チームで、チーム宇多野でしたっけ？

小泉：はい。

鈴木：なんか、そういうやり方があるんだなぁとすごく、教えてもらって。

小泉：とてもいいなぁと思っております。

鈴木：なるほどね。これから、もし、皆さん経験を積んでいますけど、これからもし新しい人が来ても、みんなでやるように支援をするということですよね。

小泉：うん。

鈴木：なるほどね。あと、自立生活プログラムってあるじゃないですか。ILP って。

小泉：やっていない。

鈴木：やっていない。それ、どうしてですか。

小泉：個別性だと思っているから。

鈴木：個別性、どういう意味ですか。

小泉：生活というのは、みんな、違う。

鈴木：例えば、大分であれば、掃除とか、洗濯と、料理。この練習を ZOOM ですけど、やって退院するという、スタイルでやってきているんですけど、JCIL は基本やっていないじゃないですか。それは、考え方として、別に必要ないというか。

小泉：必要ないからやっていないというわけじゃないけど、やっぱ、例えば、任せられるところは別に。野瀬君なんかは、ヘルパーの中に料理人がいて、板前かなんか、らしい

んですよ。ここじゃないけど。ココペリさんの。そんなのがあってもいいんだと思う。

鈴木：つまり、なんでも指示をするんじゃなくって。

小泉：ここに大事な部分があるんやろうけど。宮川泰三さんって、ずっと酒飲んでいたの。なによりも酒が好きで。みんな食べさせたほうがいいって、言ったけど、一切受け付けず。さばかんと、日本酒。何年も過ごしていた。それで、いいと思ったの。あんまりこういうスタイルがあって、というのは良くない。

鈴木：それは、長橋さんのときから、任せるのは、任せる、という感じだったんですか。

小泉：そんな感じだと思う。

鈴木：あーそうですか。それもバークレーとは違うような感じがするけど。

小泉：あーそうだね。確かに。でも、まぁ、思っていることはそうだけど、ちゃんと自分のことは自分で気にして下さいって、という言い方はしてきているし、だけで、現状はできないから。あんまり。

鈴木：現状は現状でそうなっていないけど、それはそれでいいと。

小泉：はい。

鈴木：おもしろいなぁと思うのは、指示することを大事にされているけど、一方で、任せることも大事だって言って。両方とも大事にされていますよね。

小泉：そうだけどね。

鈴木：それは、本体の人も、JC はそうなんだと思っているということ？

小泉：でも、それも公に言ってしまっていいかどうか、というのは別の話で。基本はなぁー、自分の生活は自分でしていくのは基本だけど、現状はできないから、そこらへん、言い切っていいかどうか。

鈴木：でも、そういうスタイルでやってて、自立生活プログラムはやらないですよね。

小泉：やらない。

鈴木：それは、準備をしてできるようになってから出るんじゃなくって、出てから少しずつという。

小泉：そんな感じかもしれない。出る前というのは、あんまりイメージもわかんないだろうし。

鈴木：それで、うまくいっているんですもんね。

小泉：うまくいっている？うーん。まー、いっていないところもあるけど。基本はうまく行っていると思う。健常者の頑張りもあるし。

鈴木：でも、介助者の研修は、事前にやっておいたほうがいいと思っておられるわけですよね。医療的ケアとか。

小泉：それは、やらなぁー、あかん、と思うけど。

鈴木：なんか、Bed to Bed と言っていたじゃないですか。ベッドからベッドに直接に。それは最終手段っていう感じなんですか。

小泉：ベッドからベッドにというのは、病院のベッドから

鈴木：新しい住居のベッドに。

小泉：うーん。最終手段というか、植田さんは、やっているし。それが一番いいと思っている。

鈴木：それが一番いいと。

小泉：思っている。コロナで、できひんかったけど。

鈴木：そのとき、できなかったけど、出た方がいいと思った？

小泉：思った。

鈴木：つまり、待つんじゃなくって。

小泉：そう。それがいいと思います。

鈴木：なるほどね。タイミングって大事にされていますか。

小泉：はい。家族も、こういうゆうに、揺れる動きを、こうきたときに、出さなきゃいかんから、こっちにいるときに動かないと（身体を前後に揺らして表現される）。揺れているからね。今や―という感じで。

鈴木：当事者もそうですか。

小泉：そうやね、当事者は家族の感情が常にこう、一緒に揺れているから。

鈴木：なるほどね。それで、もし、家族が反対していたら、どうされていますか。昔、青い芝の会とか、結構、家族が反対しても、無理にというか、本人が希望しているからということで。

小泉：あれやね、無理やり出した人は何人かいます。

鈴木：います？

小泉：あのー、家族、きょうだいが、後見人になってて、お姉さんが、後見人をされて、親が死んだあとは、後見人になりはって。で、施設を出るのが反対で、はずしたの。

鈴木：それは、河野さんのこと？

小泉：あーそうそう。

鈴木：その河野さんのお姉さんは、なんと言っておられたんですか。対立というか。

小泉：対立、もう会いませんと。

鈴木：今でも？

小泉：今でも。今も会ってないみたい。とかいうのもあったし、でもね、今は一緒に、考え

ていくという、ケースが多いです。

鈴木：それは考え方が徐々に変わったということですか。

小泉：社会が変わった。

鈴木：社会が変わった？

小泉：何人もいたら、出られるかもと思います。植田さんも、出たんやと、藤田さんのお母さんも思う。

鈴木：なるほどね。出ている人も多いから、説得すれば理解してくれる。

小泉：うん。そうだと思います。昔とは違うね。

鈴木：では、施設とか、病院はどうですか。病院や施設が反対しているのに、無理に出たということがありましたか。

小泉：河野さんも、山崎君も。何人もいます。ちょっと話が変わるかもしれないけど、城陽に、心身障害者福祉センターという、大きい施設がありまして、渡邉くんに話をしてほしいという依頼があったんです。

鈴木：へぇー。

小泉：だんだん変わったなぁと思って。地域移行も考えていかんと思っててと。

鈴木：へぇー。

小泉：だから、時代も変わっているなぁと思って。

鈴木：でも今回の宇多野は、例えば、野瀬さんの主治医って、やっぱり反対していたじゃないですか。

小泉：うん。そうだね。

鈴木：でも、出たというか。そういうことも選択肢としてやらざるを得ないかなぁというこ

とですか。

小泉：そうだねぇ。植田さんのときは、主治医が良かったね。主治医によって、こんだけ変わるんだと。人間ってやっぱり、あのー、プライドをつぶすと、あかんなぁーと思って。主治医っていうか、個人の感情を、へたに傷つけたら、余計にこじれるんだなぁと。丁寧に言っていかないと損をするなぁと思って。

鈴木：それは、野瀬さんのことで、ですか。

小泉：うん。

鈴木：それは、何か、働きかけ、そういうことを経験されたということですか。

小泉：なんか、食事に関しては、ちょっとは食べられるだろうと思ったけど、言えば言うほど、向こうはあかんと言う。

鈴木：なるほど。ということは、ある程度、病院の人と話しあったりすることが大事だと？

小泉：大事だと思います。

鈴木：その辺のことは、今までの、自立生活運動だと、施設と対決をして、喧嘩をして。

小泉：そうそう。

鈴木：でも、今は違いますよね。

小泉：そこは、ハードルは下がって来たなぁと思う。

鈴木：あー、なるほど。

小泉：前は、喧嘩をするしか、手段がなかった、と思います。変わってきている。

鈴木：あのー、自立生活体験室って、そこで、体験をしてから、自分の自宅に行きますよね。

小泉：うん。

鈴木：例えば、新しい自宅で、研修をするっていう選択肢はないんですか。

小泉：あるけど、お金がない。

鈴木：あー。家賃とか。

小泉：うん。契約して。

鈴木：その分のお金がかかってしまうという。

小泉：後戻りが難しい。

鈴木：もしそこにお金がついたら、そっちの方がいいんですかね。

小泉：それは、なんか、研修でなくなるから。家に入ってから、介助研修は、みんなでやんないとあかんから。やっぱ、決意を固めるための、研修だと思うから。

鈴木：なるほど、だから、別の場所でやったほうがいいと。

小泉：うん。

鈴木：あと、小泉さん、前おっしゃっていたのが、介助者不足って、そんな深刻じゃないっておっしゃっていましたよね。

小泉：事業所増えているからね。

鈴木：増えているからね。ここ、何年くらいのことですか。

小泉：ここ、2 年くらいじゃないかなぁ。昨日も来たの、仕事ないかぁーって。他の事業所から。どなたか紹介してくれませんかって。

鈴木：言われますか、仕事を探しているような感じ。

小泉：探している。新しい介助者が入ったんですけども、なんかありませんかって。

鈴木：でも、女性の介助者が少ないって、おっしゃっていましたよね。

小泉：はい。

鈴木：どうしてそうなっているのかと、思われますか。

小泉：少ないというか、まっ、入ってくるんだけどね、長続きしない。家庭との兼ね合いもあるし。女の子はいい意味で、繊細で、感情が勝つ。男の子はそうでもない。

鈴木：病院とか、施設とかって、結構女性、働いている人が多くないですか。

小泉：多いね。

鈴木：なんで、地域の場合は。

小泉：働きやすいんだと思う。施設は。

鈴木：そういう話は他の地域でも聞きますか。

小泉：女の子の話はよく聞く。女の人は難しいって。そもそも女の子は、自立している人が少ない。

鈴木：そうですか。昔から？

小泉：昔から。やっぱり、トイレの問題とか。

鈴木：何対何くらいなんですか。

小泉：（利用者のファイルを見せていただく）

鈴木：（ファイルの厚さを比べて男性と女性が）7 対 3 くらいかなぁ。

小泉：これおもしろいの（介助者のファイルを見せていただく）。女の子の方が多い。

鈴木：（ファイルの厚さを比べて）女性の方が多いですね。どういうことなんですか。

小泉：女の子が多いでしょ。長いこと、働けない。男の人は、朝も晩も、うまく働けるから

鈴木：あー。なるほど。

小泉：女の子は、時間単位。

鈴木：あー、そうなんだ。利用者の方がそういう人が多いということですか。

小泉：違う。それだけ縛られているの。

鈴木：縛られている？

小泉：社会に。

鈴木：あー、そういうこと。がっつり、働けないということですね。

小泉：そう、そう。

鈴木：やっぱり、家庭だとか。

小泉：そう。

鈴木：（女性介助者のファイルを見せて）やっぱり、この方々って、ご結婚されてて。

小泉：うん。

鈴木：ほとんど？

小泉：ほとんどじゃないけど、多い。

鈴木：なるほど、これは社会を反映していますね。

小泉：うん、社会。

鈴木：なるほど。

小泉：おもしろいんだよ。

鈴木：施設はどうして女性が多いんですかね。

小泉：やっぱり、働きやすいんだと思う。

鈴木：でも夜勤とかありますよね。

小泉：夜勤は交代制だし。

鈴木：でも、施設とかで聞くのは、男性が結婚を機にやめるっていうことは、聞くんですよ。

小泉：それは、なんで？

鈴木：ウッフッフ。寿退社。収入が低いから。

小泉：あーそうか。

鈴木：企業とか、収入のあるところに行ってしまう。

小泉：あー。

鈴木：それは、男性が多いんですけどね。ということは、宇多野の女性の患者さんを退院することになかなか関わりづらいということなんですか。

小泉：たまたまや。

鈴木：たまたま。

小泉：選んでいるわけじゃない。入院している人も男の人が多い。

鈴木：男の人は多いですよね。でも、中には女性がいるんじゃないですか。

小泉：あんまり、残念ながら、出会いはない。

鈴木：会うこともなかったですか、病棟で。

小泉：いや、出会った人はいるわ。内藤さん、20 年前に。

鈴木：内藤さんは女性の方？

小泉：はい。

鈴木：あっそうですか。

小泉：今、60。

鈴木：60？

小泉：うん。筋ジスで、長生きだと思う。

鈴木：今、一人で暮らしておられる？

小泉：うん、もう、20 年も前から。

鈴木：呼吸器は？

小泉：つけている。

鈴木：鼻マスク？

小泉：鼻でなく、口で。

鈴木：気管切開はしていない。

小泉：してない。

鈴木：進行の度合いって人によって、違いますね。

小泉：うん、違う。

鈴木：で、今、南丹市の筋ジスの高校生でしたっけ、サポートを始めているんですか。

小泉：今度、会う。

鈴木：亀岡の人からの紹介ですよね。

小泉：ワッハッハッハ。

鈴木：小泉さん、亀岡から来ておりますよね。

小泉：毎日、車で 1 時間かけて。

鈴木：わー、すごいですね。で、その亀岡の知り合いの人から植田さんに連絡があって。

小泉：そうそうそう。たまたま、家が近くって。

鈴木：今後は、在宅の人も含めて、やっていこうということなんですか。

小泉：うん。

鈴木：宇多野からは出たいという声はあがっていないですか。

小泉：今は、行けへんから。

鈴木：あー。

小泉：やっぱり、抑圧されていた人とかは、現場に、出る、人間不信や。退院したら、24 時間入ってくると、本当に難しい。

鈴木：むずかしい。そういうことは、どうすればいいんですか。介助者が必要なわけですよね、その方もね。

小泉：今、まさに真っ最中。

鈴木：でも、それでもやっていくしかないわけですよね。

小泉：やっていくしかない。そこまで、覚悟して、地域移行しないと。あと、1 日でも早く、出さなぁ、あかんわ。抑圧された生活から、1 日も早く、出さないと。

鈴木：それは、病院とか、施設とかでなくって、在宅も。

小泉：はい。家族が一番。

鈴木：なるほど。小泉さん、いつもおっしゃっているのは、出した後が大事だと。

小泉：大変。

鈴木：後がね。

小泉：それでも、出したほうがいい。

鈴木：でも、いろいろな事業所が出てきて、頑張っている事業所さん、多いですよね。

小泉：多い。多くなっている。

鈴木：利益を追求しているだけの事業所ってありますか。

小泉：利益はみんな追及しているんだろうけど、コロナのことで、陽性の人が出ると、介助行きませんっていうところがあったりとか。

鈴木：それはどうなるんですか。

小泉：だから、残ったところが、やらざるを得ない。今回、やった。

鈴木：ありました？

小泉：うん。事業所の考え方がでてくるだろうから。

鈴木：あー。でもそのときに、まとめ役が必要であると。

小泉：それが、だから、相談支援だと。ここもやっているし。でも、相談支援、もうちょっと、お金が出た方がいいかなぁ。

鈴木：それは、そうですよね。いろいろお話をしてくださり、ありがとうございました。

了